

球から無数の真っ白い生き生きした根毛が四方に伸びていた。パンジーは無為に寒さに耐えていたのではなかった。来るべき春に備えて、外からは見えない地の下で生命の力を伸ばしていた。

先日、スーパーで、以前担任したT子の母親に声をかけられた。

小学五・六年と担任したときのT子は、スポーツが得意な明るく活発な子どもだった。ところが、中学一年後半から登校できなくなった。教室に入ると発汗し、緊張し、苦しくなるという。小学生の時の明るい姿はどこにも見られなかった。

それから、私は、幾度か自宅を訪問し、とりとめのないおしゃべりをした。彼女は、いつも、自分の現状を打開しようとして努力していた。母親もよく娘の話聞いていた。

しかし、暗い表情は回復しないまま、自宅に閉じこもって卒業した。

しばらくして、進学せずスーパーマーケットで働くようになったと便りを聞いた。一年後、その店で偶然会った時には、小学生とまったく同様の明るさを取り戻していた。店長も、「明るく気さくで、とてもいい子です。店でも助かっています。」と語ってくれた。

それから数年して、T子が母親を

連れ立って私を訪れた。群馬県のある会社に就職することになったと語るその姿には、明るさだけでなくたくましさすら感じられた。

そのT子が、今、群馬の人と結婚し、まもなくお母さんになるというなんとも言えないうれしい近況を、母親が話してくれた。

あの暗く苦しい登校拒否の中学時代は、T子にとって何だったのだろうか。寒い「冬の時」には、何かの力をつけていたと思えてならない。

登校拒否は苦しく、ならばあつてほしくない。と願う教師と親たち。

しかし、その時こそ、その子どもなりに、自分らしさを模索し、力を貯えている時となっていたのかもしれない。それを保障するものは、「その子がそのまま」受けとめられ、且つ、必要とされることかと思う。

それが、悲しいかな学校は、そのままと言いつつ、どこか「君が変わってこそ、君は伸びるんだ」と言ってしまうのかもしれない。

今年も、大田小の花壇には、寒い冬を過ぎたパンジーが色とりどりに咲き競っている。

(保原町立大田小学校教諭)

体験を通して

学んだ生活科

長澤 文子



野菜作りの相談をした時のことである。一人の子どもが、

「スイカがいいな。みんなでスイカ割りをして食べようよ。」

と言ったのがきっかけで、スイカを作ることになった。でも、畑は僅か一坪程の狭い土地しかなく、私は、「ううん、困ったなあ。」

を連発してみた。すると、「畑を作ればいいじゃないの。」

と誰かが言い出し、子どもたちの頭はスイカ作りでいっぱいになった。

いよいよ活動開始である。プールの側に草ぼうぼうの荒地を見つけました。ここなら陽当たりも良く、開墾すれば作れそうである。子どもたちは、夢中になって畑作りに取り組んだ。草をむしり、鍬で耕し、汗びっ

しよりになりながら真黒になって働いた。

畑ができると、次は苗の心配である。近所のお店へ意気揚々と出掛けしたが、売り切れていた。しかし、子どもたちもやるものである。苗の注文をしてきたのである。苗が届くと、今度は用務員さんに頼んで植え方を教えてもらった。

しばらくすると、つるが伸びて道路にまで這い出した。一難去ってまた一難。せっかくのスイカが踏まれては大変と、気掛かりでしかたがない。とうとう自分たちで看板を作って立てることにした。苦勞の甲斐あって、夏休み前には、たくさんのスイカが実をつけたのである。

ところが、最後に大失敗。夏休みに鳥よけをするのを忘れてしまったのである。子どもたちと恐る恐る畑へ行ってみると、辺り一面草だらけで、スイカなどどこにも見当たらない。もうだめかと諦めかけたが、そうとう草をかき分けて見ると、みごとなスイカがにっこり顔を出したのである。草が守ってくれたのだ。

こうして念願のスイカ割りができたのである。あの時の、甘くておいしいスイカの味は、今でも忘れられない思い出となった。

もし、転ばぬ先の杖で口をはさんでいたら、この様な感動はなかった